



～A conductor of wisdom～

シヤム サンダー

Shyam Sunder

米イェール大学教授 アメリカ会計学会元会長

複数基準の並存を

IFRS適用の判断が迫ってきた。2012年の日本はもちろん、本年は米国SECによる適用判断も控えている。日本国内の議論は、導入に慎重な意見が根強くある一方で、「適用するか否かの議論は終わった」との声も聞こえてくる。

そんななか本誌は、米国の動向、適用に際し日本のとるべき姿勢とは何か。さらには、IFRS到来とともに考える、本来あるべき会計の姿とは何なのか。慶應義塾大学ビジネス・スクールの招聘で来日中のアメリカ会計学会元会長のシヤム・サンダー教授に聞いた。

文書化から陳腐化が始まる

——IFRSについて、見解を教えてください。

私の考えでは、米国基準もIFRSも違いはありません。つまり、一般的なルール作りに対するアプローチという意味では、米国基準もIFRSも、またそれ以外の基準設定主体が作っている基準も、ルールさえ書けばすべての財務報告に関わる問題が解決できると思っている点で違いが無いのです。これは財務報告に限らず、社会や経済というのは、紙に書かれたルールあるいは紙に書かれた基準だけで成り立っているものではありません。正式に決められたルールと、いわゆるSocial Norm(社会規範)の上に成り立っているものだけということ、まず考えて

おく必要があります。法律についても同じことが言えます。米国の法律も、文章に書かれたいわゆる成文法と、「コモンロー」といわれる社会あるいは地域共同体の規範の組み合わせで成り立っています。ビジネスにしても社会にしても、紙に書かれたルールだけで適切に運営していくということは不可能なのです。より安定的な、かつ持続可能な社会活動、経済活動を実現するためには、会計や企業の経済活動の分野でこれまで大事にされてきたSocial Normと紙に書かれたルールのバランスを、もう少し上手くとっていく必要があるのではないのでしょうか。

IFRSは原則主義といいますが、2,700ページもあって原則主義だといえるのでしょうか。確かに今の時点では米国基準に比べれば、IFRSのページ数は少ない。しかし、後から生まれているわけで、お兄さんやお姉さんに比べて背が低いのは当たり前。今の段階で25歳の大人の背丈と比べて、3歳児の背が低いからといって、それが根本的な違いであると結論づけることはできません。ですから、IFRSの方が米国基準に比べて根源的にベターであるという主張というのは、本当ではありません。

——IFRSにより“ものさし”が統一され、比較可能性が向上するという利点については。

確かに、標準化された“ものさし”は、社会に

大きな恩恵をもたらします。度量衡を標準化すると、取引が簡単になります。幸い、度量衡と我々が売買する数量には相関関係がありません。どういうことかといえば、ジャケットを縫ってもらうために必要な布の量は、メートルであろうとヤードであろうと分量としては同じということです。しかし、財務報告に関する基準ではそうはいきません。どの基準を使うかで、企業、市場、規制、課税、監査などに影響が出ます。だから私は、会計基準というのは、むしろ、通貨と同じだと言っています。どの通貨を使うかということは、財政政策、金融政策、通商政策、失業率など、経済の多くの側面に影響します。

また、標準化すれば調整はやり易い。しかし、同時に革新の意欲を削ぐことになります。初めから会計や財務報告のベストな状態が特定できるのであれば、それに沿った基準を作ればいい。しかし、条件や企業の行動というのは、刻々と変わります。現在はベストな基準でも、それらが変われば、もはや用を足しません。刻々と変わる条件に、どう対応するのかを考えなければなりません。変わりゆく条件の中で、問題の解決策を見つけることを認められているのが、ひとりしかいなければ、そのひとりの解決策が必ずしもベストでないという可能性が高くなってしまいます。

独占は革新を阻む

——サンダー教授が唱える、“複数基準並存”の考えに繋がるわけですね。

複数の人間で、競合する複数の解決策を検討する方が、ベストなものが生まれる可能性は高い。自動車にしても、携帯電話にしても、独占状態では、革新は生まれません。特に、会計基準というのは非常に難しい。もしかすると、携帯電話の設計よりも困難な作業かもしれません。だからこそ、複数の基準設定主体が複数の基準

を開発することが、より良い解決策を生むことに繋がると私は思っています。

これまで私は、米国で米国基準が独占している状態は良くないと主張してきました。同様に、日本で日本基準が独占している状態も良くないし、IFRSが世界を独占するのも良くない。独占状態には一貫して反対を唱えています。ひとつの基準で世界中全てのニーズが満たされると考えるのは間違いです。より良い財務報告ルールを開発する唯一の方法は、複数の基準設定主体に同時並行的に複数のルールを開発させることだと思います。そして、その中から市場に選択をさせ、比較させる。これが唯一の道ではないかと思っています。どこかの基準設定主体の独占を許すということではないと思います。

——**複数の基準が並存することで、比較可能性は失われませんか。**

逆に問いかけますと、会計基準をひとつに統一することで、比較可能性は本当に担保できるのでしょうか。日本における「連結」の話を出しましょう。90年代、日本は米国を参考に、連結会計基準を導入しました。その米国の基準がどういうものだったかという、「連結をする際の判断基準として、持ち分を重視する」という考え方です。日本もこれと同じような基準を採用しました。ただ、日本の場合、支配は必ずしも出資割合で決まらない。顧客と製造業者の関係にあるのか、経営陣を派遣しているのかなど、様々な要素が関係します。一方、米国はあくまでも資本関係です。ですから、日本のように、企業間の関係が必ずしも出資関係で規定されていないところに、米国の出資関係で規定されている基準を導入したとしても、比較可能性を担保できるとは限りません。同じ基準を世界中で使えば、比較可能性のとれた結果になると考えるのは間違いなのです。

——**先程、携帯電話開発の例が出ましたが、企**

業間競争と会計基準の競争とでは、次元の違う話なのでは。

東証と大証の上場規程は同じですか。微妙に違い、競争関係にあるわけです。会社の登記にしても米国50州、それぞれ法律が違います。また、世界を見まわすと、船についても複数の基準があります。船主によって色々な国で船を登録する。船籍は様々です。大学についても、当然重なる部分がありますが、少しずつ違っています。ですから、競争は良いことだと言っていますが、だからといって、製品間の競争と基準間の競争が同じだということはありません。同じ部分もあれば違う部分もあります。

強制適用なら驚き

——米国の動向を教えてください。

この2年程、当局はIFRSへの取り組みを少し弱めているような気がします。2年前まで、SECはIFRSの米国企業によるアドプションにもっと積極的だった印象を持っています。監査法人はどうか。ビッグ4は、もう何年も前から世界中でIFRSがアドプションされることが自分たちの利益にかなうと考えています。米国内でも、他の国でもビッグ4は、経営資源を大量に注入して、IFRS推進の活動をしています。ただ、企業はどうかというと、積極的になっていない気がします。

——そのアドプションについて。適用するにしても大まかに4つの段階があるかと思います。「全上場企業に強制適用」するのか、「一部に限り強制適用」するのか。もしくは「全上場企業に任意適用」とするのか、「一部に限り任意適用」とするのか。

私は部外者なので、最終的に当局がどういう判断をするか分かりかねますが、上場企業の中で、あるいは上場企業の一部に任意適用するという形が最も可能性があると思っています。全

上場企業にしる、一部の上場企業にしる、強制適用という判断であれば、驚きです。

——日本については、4通りの中でどれがベストな選択だとお考えでしょう。

私は日本の実情をよく知らないのですが、意味のある答えになるかどうか分かりません。あえて言うならば、企業が日本基準を続けて使うもよし、IFRSなりその他の国の基準を使うもよしという選択の幅を認めてもらえたほうが、日本の企業やビジネス、経済のためになるのではないのでしょうか。企業が自らの判断で投資家にとって一番魅力的な基準を選べばいい。複数、2つか3つの選択肢を認めることが、ベストな日本の選択になると考えます。結果、全ての企業が同じ基準を使うということにはならないかもしれませんが、それは自動車修理工も同じです。様々な車が世の中にあり、それぞれの車種を修理できるようにするのが、自動車修理工の役割です。やはり日本の企業にとって、海外や日本国内で情報提供をする際、より良い情報は何か、日本の環境に照らして考えて、その中から日本にあった基準を選ぶ。それが日本の慣習にあった会計基準の発展に繋がりますから、日本の経済界や会計界にとって良いことではないのでしょうか。



Shyam Sunder(シャム・サンダー)氏

マイエール大学教授。世界的に有名な会計理論家であり、実験経済学者。アメリカ会計学会元会長。